

治罪法全訓集 第二卷

同法省記錄文庫
保
第五百七十號
十四冊、內

第 第 第
大 一 五
架 架 號

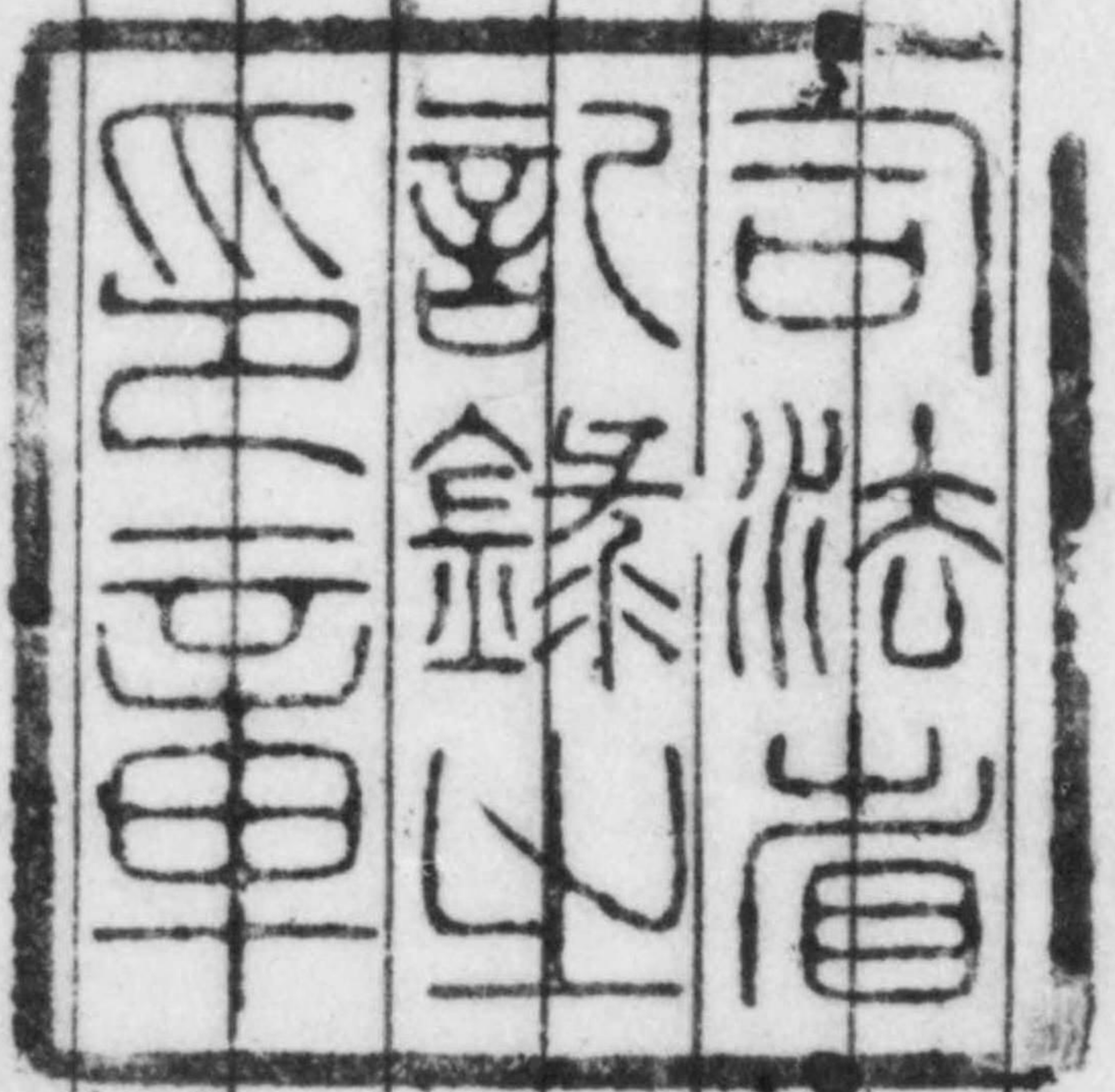
司法省
第一九號
寄贈圖書文庫

司法省記錄文庫
第一一號

XB620
C 68
18 b

甲

通則



治罪法通則

XB620	
C	8
1	b

第二編
一之卷

神奈川縣

十四年十月十八日付
全 年十二月十二日付

第一條 治罪法中上訴ト称スルハ左

第二編刑事裁判所構

列記スルモノヲ包含スル義ト心得可

成及ヒ権限

然哉

一 忌避回避ノ申立

第三十一条 通常刑事ノ

二 故障ノ申立

裁判權ニ民事ノ裁判

三 控訴

ス

四 上告

第七十二号 十四年十二月二十日
布告

五 哀訴

明治十五年一月一日ヨリ

六 再審ノ訴

刑法施行候ニ付法

七 疑義及ヒ異議ノ申立

律規則中罰例ニ係

右審案スルニ一ノ一條 治罪法中

ルモノハ左ノ例ニ照シテ

上訴ト称スルハ故障控訴上告

処断スルニ

司法省

非常上告哀訴再審ノ訴裁判官
 第一條凡懲役ハ十日
 以上ヲ重禁錮ニ処シ十
 日以下ヲ拘留ニ処ス
 第二條凡禁獄及ヒ
 禁錮ハ十日以上ヲ輕
 禁錮ニ処シ十日以下
 拘留ニ処ス

指令

第一條 上訴ト称スルハ故障控訴上
 告非常上告哀訴再審ノ訴裁判官
 轄ヲ定ムルノ訴裁判官轄ヲ移スノ訴
 云フ

兵庫縣 十四年十月八日付
 全年正月廿三日付

第一條 明治十年才十三号布告ハ別段ノ法
 第一條法ニ照シ律ニ

律ナルヲ以テ刑法実施ノ後モ仍ホ並ヒ行
 ハル、ヤ果シテ然ラハ其罰金ハ刑法科料
 ノ金額ヲ超ヘサルニ因リ違警罪裁判
 所ノ管轄ニ屬スル儀ニ有之候哉
 第二條 同上布告消滅セサルトキハ
 府和廳ノ呼出ヲ受ケ遅不參スル者
 處分ニ付テノ明治十年御省丁才五
 十七号御達モ同様ノ儀ニ有之候哉
 指令
 第一二條 本年才六十二号公布ノ通
 分六條法律規則
 心得
 中罰例アリト云モ
 刑法ニ正條アルモノ
 刑法ニ依テ処断ス

宮崎始審裁判所判事 十五年二月廿日付
 全年金月四日付
 明治十四年十二月才七十二号布告ヲ以テ
 刑法ニ依テ処断ス

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付
 法律規則中罰例ニ係ルモノハ左ノ例ニ
 照シ処断スヘシト而シ其分三條ニ凡ソ
 罰金及ヒ科料ハ二月以上ヲ罰金ニ処
 シ二月未満ヲ五錢以上一月九十五錢以
 下ノ科料ニ処ストアリ然ラハ烟草稅則
 ヲ犯ス者五錢以下ノ処分ニ及フヘキ所
 ハ如何ノ名称ヲ以テ処断スヘキカ或ハ
 思フ其五錢以下ノ分モ之ヲ五錢ト為
 シ處断及フヘキ乎將タ之ヲ切捨ツルモ
 乎

指令

伺ノ趣五錢以下ノ科料ニ該ル者ハ
 但如審裁判所々
 在ノ地ヲ除リ外ハ
 治安裁判所ニ於テ

五錢ト為シ処断スヘキ儀ト心得可シ
 之ヲ裁判スルヲ得

仙臺始審裁判所換事十五年三月三日付
十五年三月九日付

各縣ヨリ当集治監ニ護送ノ因徒途
 第百六十二号布告十四年二月六日

中ニテ逃走直ノ捕縛ニ其後集治監
 明治十年一月廿三付

ハ送り同檻ヨリ処分ヲ乞フ右ハ治罪
 号布告府縣廳ノ

法分百七條ニ依レハ管轄裁判所
 條規ニ違反スルモ

檢察官ニ送致ス可キハ勿論ナシ
 一處分規則ノ儀ハ

トモ若シ遠隔等ニ係ル時ハ又逃
 明治十五年一月一日

走モ量リ難シ依テハ其管轄裁判
 ヲリ廢止ス

判所ハハ通知而已ニテ當廳ニ於
 テ処分シ可然武此段内訓ヲ乞フ

拘留期限モアリ至急御指揮有
 夕シ

指令

囚徒護送ノ途中逃走ニ直ニ捕縛
シタル者処分ノ儀伺ハ本年吉省
丙方七号達ニ依リ豫テ管轄裁判
所ヨリ囑託アリタル者ト首做シ通
知スルニ止リ其廳ニ於テ処分スル
儀ト心得可シ

大津始審裁判所判事

十五年三月廿三日請刑
全 年四月廿日内判

陸軍刑法廿一条ニ豫備後備ノ軍
籍ニ在ル者ハ召集中ノ外此刑法ニ依
テ処断スルコトヲ得ス云々トアリ又明
治十五年司法省丁方二号達中陸
軍卿ヨリノ伺方四条ニ召集中罪

ヲ犯シ若クハ旧罪発覺スル者ハ軍
衙ニ於テ審判致シ云々ニ伺ノ通ト
御裁令アリタリ右召集中トハ其
召集ヲナス場所其學堂等ハ已ニ
到着ノ後ヲ謂フカ又ハ召集セラル
者其命ヲ承知セシ時ヨリ以後
ヲ謂フカ若クハ召集ノ場所ハ向ケ
テ發解セシ後ヲ謂フカ
右ハ左ノ通陸軍省ハ御照會ノ上御
内訓相成可然哉

甲号陸軍省ハ照會

十五年四月十一日

陸軍刑法廿一条及ヒ明治十四年
十二月十日貴省ヨリ太政官ハ御伺

相成候所四條ニ召集中トイハルハ入
営以上ヲ指スモノニシテ改令其召
集ヲ受リルモ赤リ鎮基營所等ハ
到着セサルハ召集中ト云フ可カラ
サル義ト考量候ハ凡右ニ付伺出ノ向
モ有之且貴者御管係ノ件ニ係ル
ヲ以テ御意見承知致度及照會
候条至急何分ノ御回答有之度候也
乙号陸軍省ヨリ回答 十五年四月十八日
陸軍刑法ヲ十一條及ヒ昨十四年十二月
十日當省ヨリ大政官ニ伺出候所四
條召集中ノ文意ニ付御照會ノ趣
了承右ハ御考量ノ通入營以上ヲ指

スノ主義ニ有之候此段及御回答候也
右ハ陸軍省管係ノ廉有之別紙
甲号ノ通令者ハ御照會相成居
候処今般乙号ノ通同者ヨリ甲
答有之然ルニ該件ハ至急ヲ要
スル者ニ候向電報ヲ以テ左ノ通
御内訓相成ニカ然哉

内訓

各月二十三日付請訓陸軍刑法ヲ
十一條等ニ召集中トイハルハ其鎮基
營所等ハ入營以上ヲ謂フ

A blank ledger page with a grid of 10 columns and 10 rows. The grid is defined by solid lines. A vertical line is drawn between the 3rd and 4th columns, and a horizontal line is drawn between the 5th and 6th rows, creating a 3x5 section on the left and a 7x5 section on the right.

A blank ledger page with a grid of 10 columns and 10 rows. The grid is defined by solid lines. A vertical line is drawn between the 3rd and 4th columns, and a horizontal line is drawn between the 5th and 6th rows, creating a 3x5 section on the left and a 7x5 section on the right.

司
海
書

第三十二条 裁判所ノ位
置及ヒ管轄ノ區劃ハ
司法卿ノ奏請ニ因リ上
裁ヲ以テ之ヲ定ム

刑九條 刑三十四條 刑三項 指揮ノ手
続ハ刑四百六十二條ヲ以テ之ヲ觀レハ
罰金其他沒收物品等ハ命令各
ヲ用ユルモ其外犯人ヲ刑ニ付スル
等ノ如キハ或ハ口達ヲ以テ執行ヲ
指揮シ或ハ命令各ヲ用ユルモ
差支無之乎且又罰金等徴收ノ
命令書ハ書記之ヲ執行スルモノ
乎將又刑三百三十二條ノ場合ニ
於テ副席ニシテル者拘當ノ刑ノ申
渡ヲ受ケタル時ハ上訴期限経
過ノ后檢察官ヨリ拘引状ヲ發シ
執行ヲ命スル乎若シ又禁錮以上ノ

刑ニ罹ル者同條ノ場合ニ於テハ
或ハ公判以前豫審判事ヨリ拘
引状ヲ發付スルモノト爲ル乎又刑法
刑三十九條同刑四十條末項ノ場合
主刑ヲ免止シ監視ニ付スルノ
如キモ檢事ヨリ更ニ執行ヲ命
スル乎又刑法第七十九條懲治場
ニ留置スルハ刑ノ部内ニ非サルモ
同條ノ場合ニ於テ法官寫告状ニ
明示セサルヲ得ス左スレハ其執行
ハ檢事之ヲ命シ若又該場ヲ逃
走シタル時ハ其死ハ向ハサルモ
檢事ヨリ拘引状ヲ發付スルノ

可心得乎

指令

第九條 體刑ノ執行ハ裁判宣告、
謄本又ハ抜書ヲ送致シテ其指
揮ヲ為ス可シ

罰金徴收命令書云々十四年當省

下カ二十九号達ノ通治罪法カ三

百三十二条云々ハカ一項指令ノ通

検事ヨリ更ニ拘引状ヲ送付スル

ニ及ハス刑法カ三十九条云々伺

ノ通

刑法カ七十九条云々行政ノ処分ニ任

スル

岡崎 輕罪裁判所 検事

十五年二月廿四日請
全年三月廿四日内訓

第二十四条 刑事ニ付キ

第一條 治罪法カ三十四條カ三項裁

検察官ノ職務左ノ如シ

判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮

一 犯罪ヲ捜査ス

ストアリ其命令及ヒ言渡ハ豫審

二 犯罪ニ付キ取調ノ処分

判事ノ発スル命令豫審公判々事

及ヒ法律ノ適用ヲ裁

ノ言渡ノ執行ヲ指揮スルモノ

判官ニ請求ス

コテ其命令及ヒ検事ノ承認ヲ得ルト

三 裁判所ノ命令及ヒ言

出モ豫審判事ニ於テハ急速

渡ノ執行ヲ指揮ス

要スル外検事ヲ經由セザレハ

四 裁判所ニ於テ公益ヲ

巡査ニ對シ直キ命令及ヒ發スル

保護ス

一カ得サル乎將検事ハ其執行

ヲ指揮監督スル迄ノ長ニ侵ス

内訓

岡崎 輕罪裁判所

第ニ條 前段見解ノ通

第ニ條 治罪法ヲ四ノ條以下ニ於テ
裁判管轄ノ定リヤリトモモ其夫其
婦ヲ唆カシ出奔シ后若干年ヲ
隔本夫其所在ヲ知り管轄裁判
所ニ告訴スル如キハ其告訴ニ依リ
法律ノ力アルモノナレハ告訴ヲ受
ケタル地ヲ以テ裁判管轄トナス
ハキ午將継続犯トシ姦夫及婦
処在ノ地ヲ以テ其管轄トナス
ハキ義ニ候哉

内訓

第ニ條 請訓ノ場合ノ如キ裁判

管轄ハ治罪法ヲ四十一條ニ從フ

山田始審裁判所 十五年二月十三日雙岡
四年四月二日四答

第ニ條 治罪法ヲ三十四條分三項
ノ明文ニ拠レハ豫審掛ニ於テ勾引
状勾留状等ヲ送スル場合ニ於テ
ハ該令状ヲ檢事ニ送付シ檢事ハ
其執行ヲ巡查ニ命スル者ナルカ
又密室監禁及ヒ保釈責付等
ノ處分ヲ為シタリ時其旨ヲ監
倉ニ通知スルカ如キハ皆檢事ノ
職務ニ屬スル者ナルカ

田答

第ニ條 御見込ノ通

第三十六条 裁判所ニ
書記一名又ハ數名ヲ
置ク

第三十七條書記ハ豫
 審及ヒ公判ニ立會ヒ調
 書公判始末書其他訴
 訟ニ関スル一切ノ書類ヲ
 作ル可シ

ノ管轄トナシ可然哉

右審案スルニ刑法總則ニマル自首
及ヒ宥恕減輕ノ如キ減輕ハ罪ノ性
質ヲ輕クスルモノニ非スニテ止リ其
科ス可キ刑ヲ減輕スルノニ故ニ一
般ノ減輕ニ依リ重罪ノ刑ヲ減シテ輕
罪ノ刑ニ降スヘキ犯罪ハ重罪裁判
所之ヲ管轄スト云凡刑法中
各本條ニ何等ヲ減スト記載シタル
減輕ハ其罪質ヲ輕クシタルモノナレハ
其減シタル罪ニ相當スル刑ヲ科ス
ルモノニ付疑問ト通ト考量候因テ
左ノ通

内訓

治罪法中疑議ノ件ニ依リ請訓ノ趣ハ
其見解ノ通

水戸裁判所檢事 十四年十二月十七日請訓
十五年一月十八日内訓

第一項 治罪法第三十八條ニ裁判官轄
ヲ定ムルノ明文アリ然ルニ豫審判事ニ
於テ重罪事件ノ取調ヲナスコ方リ宥恕
減輕及ヒ自首減輕等ノ如キ法律上
當然輕減シテ輕罪ニ該ルカ如キ
ハ其事件輕罪裁判所ヲ以テ管轄
ト為スカ又ハ減輕ノ如何ニ關セス其
罪ノ種類ニ因リ重罪裁判所ヲ以テ
管轄ト為ス乎

内訓

第一項 重罪ニシテ宥恕及自首輕減
ニ因テ輕罪ノ刑ニ該ル者ハ仍ホ重罪
裁判所ヲ以テ其管轄トス

姫路始審裁判所檢事十五年四月十日請訓
全年四月十日内訓

爰ニ甲裁判所管轄内ニテ輕罪ヲ犯シ

逃走シタル被告人乙裁判所管轄内

ニテ違警罪ヲ犯シ丙警察署(裁判
警察署ト其区域ヲ異ニシ甲乙裁判所ニ歸リ警
署ヲ云フ)

ニ於テ取ルス際違警罪ト共ニ甲ノ

輕罪宛覺スルル片其違警罪ハ乙裁

判所管内(即チ丙警察署ニテ
輕罪ハ)

甲裁判所ノ管轄ナリ時ハ其違警

但特別輕減此
限ニテス
理則別紙参照

首ニ依リ
首ニ依リ
首ニ依リ
首ニ依リ

罪ヲ保セテ甲裁判所ニ於テ管轄ニ
裁判スルコトヲ得ハキカ謹テ請訓
候也

右審案スルニ請訓面引例ノ場

合ハ治罪法分三十八條分二

項ニ依リ上等ノ裁判所即チ

甲裁判所ニ於テ管轄ス可キ

者ト考量ス目チ左ノ通

内訓

別紙請訓ノ趣治罪法分三十八

條末項ニ依リ義ト心得ハシ

山田輕罪裁判所檢事十五年二月八日請訓
全年四月十日内訓

第二十四條 治罪法分三十八條ノ末段

二上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス
 トアルニ因リ附帯ノ犯罪ニ非サルモ
 二個以上ノ罪同時ニ登シテハ
 其共犯ヲ悉リ併セザルヲ得サルカ
 如シト雖モ必ス之ヲ併スヘキモノ
 トセハ大ニ不便ヲ生スヘシ例ハ甲
 乙丙ノ三名長崎ニ於テ共謀テ強盜
 ヲ為シ甲ハ東京ニ走テ又丁戊等
 數名ト竊盜ヲ犯シ乙ハ函館ニ到
 テ又他ノ數名ト謀リ竊盜ヲ為シ
 丙ノモ長崎ニ於テ逮捕スルカ如キ
 ハ従来其例ナシトセス甲乙二名カ
 強盜罪ノ為ソ丁戊以下數名ヲ悉

ヲ長崎ニ送致スルモノトセハ許多ノ
 費用ト時日ヲ徒消スルノミナラス
 訴訟関係人非常ノ困難ヲ受ケル
 ニ至ラシ如斯ハ豈立法ノ精神ナラ
 シヤ故ニ万三十八條中同時ニ同
 一ノ被告人ニ對シテ訴アリタル時ハ
 トアルニ因リ檢察官ハ其不便ト
 スル所ノ罪ハ其地ヲ管轄スル裁判
 所ノ檢察官ニ告発シ其管轄内ノ
 犯罪ノミヲ起訴スルヘキ得ヘキ
 乎

内訓

万二十四條丁戊以下數名ハ丙ヲ逮捕

シテ其地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリト
ス然レモ同一ノ裁判所ニ於テ取調ヲ
要セザル事件ハ本年當省丙分七
号達ニ依リ必スシモ之ヲ送致スル
コト及ハス

福島輕罪裁判所檢事十五年四月十日付
全 年 全 月 廿三日付

容年分四十六号公布ヲ以テ當分ノ内

裁判管轄ヲ規定セラル候処方ハ

罰金科料ニ該ルモノニモ適用候

義ニ可有之果シテ然ラハ該罪犯

ニ付テハ現ニ勾留ヲ受ケサルモ本年

省丙分七号御達ニ準拠シ得ル義

ト相心得可然哉

指令

伺ノ通

宮城上等裁判所檢事十四年十月廿九日付
十五年五月九日付

第四條 治罪法分三十八條二項例ハ

ハ重罪裁判所ニ於テ同一ノ被告人ニ

對シテ訴ヤリタルモ若シ本按事件輕

罪ナル時ハ分四百二條ノ規則ニ依リ

尚ホ重罪裁判所ニ於テ之ヲ管轄

スル午將夕輕罪裁判所ニ送致

ス可キモノナリ哉

指令

分四條 其重罪裁判所ニ於テ裁

判ス可キ者トス

理由一ノ被告人ニ對シ二個ノ罪ノ
 公判ヲ求ムル時重キ罪ヲ裁
 判スル裁判所輕キ罪ヲ併セ
 テ裁判スルハ治罪法ノ原則ナ
 ルヲ以テ重キ一罪ハ免訴無
 罪トナルモ他ノ一罪ハ其裁判
 所ニ於テ裁判スルヲ至當トス
 且頗ル便ナリ因テ本指令ニ
 及ハレシトス

名古屋控訴裁判所判事十五年九月十日付
全六年六月十七日付
 豫審判事ニ於テ重罪ナリトシ重罪
 裁判所ニ移スノ終結言渡リナシ
 檢察官重罪裁判所ニ公訴セシ

事件ヲ重罪裁判所ニ於テ輕罪ナリ
 ト見認ル時又一ツノ被告人ニ對シ附
 帶ノ犯罪ニマラサレ重罪ノ公訴
 マリタル時重罪裁判所ハ重罪犯
 ノ証憑充分ナラストモ輕罪犯ヲ
 以テ罪スヘキモノト見認ル時又公
 判用庭前一件各類ヲ完ミスルニ
 其犯罪ハ輕罪ナルト判然タル
 時ノ如キ重罪裁判所ノ管轄ス
 ハキ犯罪ハ消滅シ其管轄外タル
 輕罪及違警罪ノミトナルニ付治
 罪法中七十余ニ重罪裁判所ハ
 其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪

ヲ裁判ストアルヲ以テ同裁判所ハ
管轄地ノ言渡ヲナスニ止リ輕罪
等ニ付テハ裁判ヲ與フイキモノ
アヲサルカ如クト云ヒ重罪公判
中被告事件輕罪等ナル時ハ管
轄地又ハ相當ノ裁判所へ移ス
言渡ヲナスハ之トノ明文無之而
之テ分ニ編布一章通則才三十八
条才二項ニ重罪及ヒ輕罪又ハ輕
罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同
一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ
附帶ノ犯罪ニ非スト云ヒ上等ノ
裁判所係セテ之ヲ管轄ストアリ

此条ノ真面目ハ重罪及ヒ輕罪又ハ
輕罪及ヒ違警罪ノ係テモ之ヲ
時即チ二罪俱テ一ツノ重キ後
ノ場合ヲ指示モリルハ勿論ナルハ
之ト云ヒ宜シク之ヲ推考スルニ
右ノ場合ハ之ノ適用スヘキモ
論スヘカヲサレカ如ク何トヤレハ違
警罪公判才三百三十七條ニ被告
事件重罪又ハ輕罪ナルハ管轄
地ノ言渡ニシテ云々トアリ輕罪公
判才三百六十條ニ被告事件重罪ナル
時ハ管轄地ノ言渡ヲサレ云々トアリテ
管轄地ノ言渡ヲナスハ之ト命令モリ

ハ下等ノ裁判所ニテ上等ノ裁判所
裁判スヘキ犯罪ヤリト見認ラル時
ニ在リテ獨リ重罪裁判所即ケ上等
ノ裁判所ニテ輕罪又ハ違警罪即
ケ下等ノ裁判所裁判スヘキ犯罪ヤリ
ト見認ラル時ニ於テハ管轄違ノ言
渡ヲナスヘシト命令シラル條ヤケレハ
ナリ而シテ假令評問前ニ在テ輕罪犯
ナリト思料ミタルモノト雖モ豫審判
事ノ終結言渡アリ検事長ノ公訴
アリタル以上ニ重罪裁判所ハ其取
調ヲナサレルヲ得サレハ論ヲ誤ラサル
ニ因リ前掲三箇ノ場合ニ於テハ輕

罪公判ガ三百五十九條ニ被告事件
違警ニ罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡
ヲナシトアルトガ三十八條トテ援引
ニ重罪裁判所ニ於テ輕罪等ノ
裁判ヲナシ可然義ト見込候得共
疑議ヲ生シ候向相伺候

指令
伺ノ通

ルノミナラス一ノ便益アルヲ見
サル可シ

内訓

治罪法第三十九条第一項ハ時ト
場所トノ附帯ヲ謂フモノニ付
必シモ犯罪事件ノ関連ヲ要
セス

京都宮始審裁判所檢事

十五年五月廿日實向
全年六月五日回春

強盜犯某甲アリ其犯罪ニ依リ得タル
物品ヲ情ヲ明カシテ乙某ニ讓與セリ
甲ノ罪ハ重罪ニシテ乙ノ罪ハ輕
罪ナリ此場合ニ於テハ甲ハ重罪裁
判所ニ移シ乙ハ直々ニ輕罪裁判

所ニ於テ相當ノ刑ヲ言渡ス可キヤ竊
盜一助アリ其犯罪ニ依リ得タル衣類
ヲ情ヲ告ケス典舖ニ藏ニ典賣ニ
ニ藏ハ一助トハ曾テ交際セシモノ
非ラス只始テ其面ヲ見タル者ナレ
贓品ニハマラサレ可シト思料ニ牙保
ナクシテ之ヲ典買ニシリ一助ノ罪ハ輕罪
ニシテニ藏ノ罪ハ違警罪ナリ此場合
ニ於テハニ藏ハ直々ニ警署ニ於テ
処分シ一助ハ輕罪裁判所ニ移シ而
シテ輕罪裁判所ハ一助ノ裁判ト共ニ
ニ藏ノ典買セシ贓物ノ処分ヲ為ス
可キ乎

右ハ實際ニ於テハ附帯ノ犯罪ト同リ
同一ノ裁判所ニ於テ管轄スル方官
民共ニ便利ナレバ既ニ治罪法亦三
十八條以下ノ規則アル以上ハ前二
項ノ如クスルノ外ナカル可ニ然レ共
同法亦三十九條ヲ如斯モノ定モ包
含スルモノト解散スルノ道ハ無之
歟

甲答

御疑面ノ趣了承右ハ治罪法亦三十
九條ニ包含蓄ニタルモノニ非ズ全ク
御見解ノ通ト思考ス

安濃津始審裁判所檢事

十五年六月廿二日
同日廿八日付

刑法實施以前ノ犯罪ニテ新法ハ重罪
旧律ハ懲役五年以下ニ該ルハキ者ハ
丙卯二十一号連ニ此率ニ輕罪裁
判所ノ管轄ニ屬セシム可キヤ至急
指令待ツ

指令

刑法實施以前ノ犯罪ニテ懲役
五年以下ニ該ル者処分ノ件伺ノ
通

青森縣

十五年二月六日
令 年全月廿六日付

明治十四年水政官第百四十六号公布

治罪法第百四十条に犯罪ノ地ヲ以

テ裁判管轄ト規定有之候処當

合ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人

ト至ル管轄裁判所ヨリ囑託ア

リタル片ハ其被告人逮捕ノ裁判

所ヨリ囑託アリタル片ハ其被告人

逮捕ノ裁判所之ヲ管轄スヘシト

アリ右ハ重罪輕罪ニノミ適用スヘ

キモノニシテ違警罪ノ如キハ治罪

法第百二條ニ依リ逮捕ヲ許サレ

モノヤレハ無論此法ヲ準拠スヘキ

第百四十条同等ノ裁判所

ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判

所ヲ以テ豫審及ヒ公判

ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル片ハ

被告人逮捕ノ地ノ裁判

所ヲ以テ其管轄ナリトス

第百四十六号布告
十四年九月
二十日

治罪法第百四十条ニ犯

罪ノ地ヲ以テ裁判管

轄ト規定有之候処

當合ノ内犯罪ノ地

分明ナル被告人ト至

我々有之向敷果シテ然ラハ實際
 上差支不少而已ナラス為リ、被告
 人々困難ヲ興フル義ニ付容年大
 政官外四十四号公布ニ依リ違警
 罪ニ於テハ書分ノ内管轄警察署
 分署ヨリ囑託アリタルハ其被告
 人所在ノ地ノ警察分署ヲ以テ管
 轄ト致シ可然哉

指令

伺ノ通

福岡縣

十四年十二月九日付
十五年二月廿八日付

第五條 司法警察官重軽罪ノ現行犯
 ヲ追跡シ他管轄ニ於テ逮捕シタル場合

モ我管轄内ト同シリ檢証処分等ノ
 職權ヲ行ヒ可然乎

第五條 司法警察官重軽罪ノ現
 行犯ヲ追跡シタル時ト雖モ其管
 轄外ニ在テハ分百五條ニ依リ常
 人ノ身分ヲ以テ逮捕スルヲ得ヘキ
 ノ司法警察官ノ場合ニテハ逮
 捕ノ權ナキヲ以テ無論檢証処
 分ヲ為スルヲ得ス

指令

第五條 第百五條ニ依リ被告人ヲ逮
 捕スルヲ得ト雖モ他ノ管轄地内ニ
 於テ檢証処分等ノ事ヲ行フヲ得ス

酒田始審裁判所檢事 十五年六月十四日
全 年 全 月 廿九日

第一条 他管轄者一時止宿中罪
ヲ犯シ去テ住所ニ歸リタル者及ヒ
其所在知レス遂ニ兩席裁判ニナル
可キ者其住所ノ地最モ遠隔ニシテ
呼出ノ手續及ヒ被告ノ出頭又
ハ欠席裁判ニ係ル規則ノ履行等
官民共ニ不便ヲ極ムルモノ其ノ事
件ノ繁雜ナリテハ被告ノ逮捕
ノ地ノ裁判所ハ囑託スルモノト同
一ニ之ヲ住所ノ地ノ裁判所ハ囑託
致シ可然哉

指令

第一条 一時止宿中罪ヲ犯シ住所
ニ歸リタル者ハ住所ノ地ノ裁判所
ニ囑託スルヲ得其所知レサル
者ニ付欠席裁判ヲ囑託スルヲ
得ス但各該送達裁判執行
等ハ当然之ヲ囑託スルヲ得
第二条 右囑託ノ義ハ明治十四年
亦四十六号御布告第二項ニ依ルニ
裁判所ヨリ裁判所ニ囑託スル
モノニ有之又治罪法ニ於テ裁判
官ハ檢察官ノ起訴シタル事件
ト雖モ其管轄ニ求ル時ハ之ヲ
存クモモノヤレハ檢察官ヨリ檢

察官ハノ囑託ハ其効十キカ如リ
存セラレ候然レモ又猶之ヲ考フ
ルニ右御布告ニ裁判所ト指シリ
ハ公判豫審檢察ノ別ナリ之ヲ總
稱スリルモノモテテ檢察官ノ囑託
ト至ル其効有之モノ候哉

第ニ条 後段同ノ通

山口縣 十五年六月十九日付
全 年 全 月 廿 八 日 付

才一条 軍人軍属ニシテ常律ノ重罪輕
罪ノ現行犯マレハ司法警察官之
逮捕ニ直ニ管轄檢察事ニ一件各類ト
共ニ送致シ其旨所轄鎮臺又ハ管
所ハ通報シ可然哉

才二条 軍人軍属ノ非現行犯ヲ人民ヨ
リ司法警察官ハ告訴告発ナシ
ルハ告告訴告発收メ管轄檢察事ニ送
致シ可然哉

指令

才一条 才二条 共同ノ通

第三条 軍人軍属違警罪ヲ犯セ

ルハ常人ト等シク処分シ可然哉

才三条 重輕罪ト俱テタル違

警罪ヲ除クノ外同ノ通

浦和輕罪裁判所檢察事 十五年六月九日
全 年 全 月 廿 四 日 付

才一条 犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄スル

ハ治罪法中才条有之候得共當

分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖
此管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時
被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管
轄スヘキ旨客歲即四十六号ヲ以テ
布告相成候処右裁判所ヨリ云々
トアルハ彼我檢察官ノ処分ニシテ
豫審及ヒ公判々事ハ委囑被屬
凡為ス能ハサル儀ニ候哉又ハ本文
裁判所ト有之以上ニ渾テ囑託スル
トヲ得ヘキ義ニ有之候哉

回答

第一条後段御見之ノ通

津山始審裁判所判事

十五年五月廿三日請訓
全 年六月十七日判訓

才八条明治十四年才四十六号公布才
二項ニ犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖
此管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時
ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之
ヲ管轄スヘキト有之右囑託ハ管
轄豫審判事ヨリ逮捕ノ地ノ豫
審判事ニ囑託スルヲ得ヘキ義ト
相心得可然哉果シテ然レハ囑託
ヲ受ケタル豫審判事ハ其旨ヲ檢
事ニ通知シ而シテ通常豫審ノ手
続ニ從ヒ終結ヲ為スヘキ義ニ有
之ヘキ哉

内訓

并八条公判之事豫審判事若クハ
檢察官ヨリ囑託ヲ為シ其囑託
ヲ受ケケル者ハ通常ノ規則ニ從
ヒ豫審若クハ公判ノ処分ヲ為ス可
シ但被告人ヲ逮捕シタル地ノ檢
察官ハ本年当省丙卯七号達ノ
通心得可シ

福島始審裁判所檢事十五年二月二日付
全年全月廿八日付

第一条昨十四年九月亦四十六号公布管
轄裁判所ヨリ囑託イリタル時ハ其被
告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄云
々ト有之候右午達ハ甲裁判所ノ管
轄ナル被告人ヲ乙ノ裁判所へ囑

請
出
書

託スルハ甲裁判所檢察官ヨリ
公訴ノ一ツ乙裁判所檢察官ニ囑
託スルニ止ニリ候哉又ハ甲裁判所
豫審判事ハ豫審豫審ヲ及ビ及
不豫審ハ豫審判事ナリ
除シ檢察ハ公訴公判ト事ハ公判ト
各章ル所ノ件ヲ保セ囑託スル義
ニ候哉

亦二条前條亦四十六号公布ニ逮捕
ノ地ト有之上ハ逮捕ノ地ニアラスニテ
豫治豫治ノ事入事ノ被告入所在ノ地ノ裁判
所へ囑託スルハ不相成儀ニ候
哉

指令

司
法
省

万一条分二条共當者本年丙分
 七号達ニ依テ了解スヘシ
 万三条甲裁判所管轄内ノ警部
 輕罪以上ノ準現行犯人ヲ逮捕シ
 シル時身分犯罪ノ種類又ハ場所
 ニ因リ乙ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル
 犯者ナル事明瞭ト認ムルモ甲裁
 判所ノ檢事ニ送致スルモノト存
 候得共或ハ直ニ乙ノ檢事ニ送
 致スルモ苦シカラサル哉
 万三条^精直々ニ乙裁判所ノ檢事
 ニ送致スルヲ得サル儀ト心得ハ
 シ

仙臺始審裁判所檢事

十五年四月廿七日付
全 年五月十五日付

栃木縣下野国出生無籍

常世 幸吉

右者當管轄内、於テ竊盜罪ヲ犯シ
逮捕訊問中明治十年中東京裁判
所ニ於テ懲役十年之処刑申渡ヲ受
ケ檢事ヨリ上告申出テ走リ上旨供
述候ニ付東京輕罪裁判所檢事
ニ照會候処右ニ逃走ノ後大審院ニ
於テ原裁判ヲ破毀横濱裁判所
ニ移スノ判決相成タル者ノ趣申答
有之就テハ全ク數罪俱發ノ例ヲ
以テ治罪法第四十一条ニ依リ難ク

第四十一条數箇ノ裁判所

ノ管轄地内ニ於テ同時ニ

又ニ繼續シテ一箇ノ罪ヲ

犯シタルハ、其中ニテ被

告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ

以テ其管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テ

モ亦同シ

横濱輕罪裁判所ニ於テハ大審院ヨリ移サレタル確定管轄ニ候ハハ乃々被告人常世幸吉ヲ該裁判所ニ送致可然哉又仙臺輕罪裁判所ニ於テハ現時犯罪逮捕ノ地ニ候ハハ當裁判所ノ管轄ニ屬シ可申哉治罪法通条無之ニ當載ニ於テ豫審ノ中止ヲ請求置候未至急御指揮ヲ仰キ候也

指令

大審院ニ於テ横濱裁判所ニ移スノ判決ヲ為シタル以上ハ横濱輕罪裁判所ニ於テ處分ヲ為スハ正當ナレト明治

十四年卯四十六号布告ニ依リ同裁判所ノ囑託アリタルハ其裁判所ニ於テ審理スヘシ

福島輕罪裁判所檢事

十五年四月十七日請訓
全 年五月十六日内訓

一甲乙共ニ輕罪ヲ犯シ別ニ甲一人ニテ重罪ヲ犯シタルハ其輕罪ニ付テハ甲乙附帶ノ犯罪ヤリト虽モ抑乙ノ輕罪タル聊カ甲ノ重罪ニ關係ヲ有セザルモノナルニ因リ甲ハ重罪裁判所乙ハ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト相心得可然哉

内訓

亦一項乙ノ犯シタル輕罪モ甲ト共ニ

重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

但重罪裁判所ニ於テ乙ノ犯罪

ヲ甲ト共ニ裁判スルニ必要

トセザル場合ハ伺ノ通

一重罪裁判所ノ管轄ニ屬スル中禁

錮以下ノ犯罪ニ付テモ仍ホ治罪

法ヲ三百七十八條ニ準テ辯護人

ヲ要セザルヲ得サル義ニ可有之哉

勿二項禁錮以下ノ刑ニ該ル者ハ

治罪法ヲ三百七十八條ニ從テ及

ハサレ可シ

宮城上等裁判所檢事

十四年十月廿九日付
十五年五月九日付

第四十二条 犯罪ノ地ニ非

第廿一条 治罪法ヲ四十二条第一項最

ナル裁判所ノ管轄地内

近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シト

ニ於テ被告人ヲ逮捕シ

今爰ニ仙臺福島兩裁判所管内

タル片ハ最近ノ管轄裁

ニ於テ數箇ノ罪ヲ犯シ水戸裁判

所ニ送致スヘシ

所管内ニ於テ逮捕ニ兩裁判所

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕

ヨリ囑托アラナル時ハ最近ノ裁

シタル片ハ其令狀ヲ登

判所乃々福島裁判所ニ送致ス

タル裁判所ニ送致スヘシ

可キ者ナリ然レモ若シ仙臺裁判

所ニ於テハ既ニ豫審又ハ公判ニ

着年ニシタル時ハ亦四十三条ノ規則

ニ依リ其着年ニシタル仙臺裁判所

ヲ以テ管轄ト為ス可キ者ナリ哉

指令
茅五条同之通

市
法
精

茨城縣

十五年一月十二日付
全十五年正月廿日付

第三條 本法第四十三條ニ逮捕スル

トテ許サストヤルハ單ニ違警罪犯ヲ

指シタル儀ニ候武法ニ明文ナシト

雖此輕罪ニテ罰金ニ該ルモノヲ

モ併テ指シタルモノト心得可然

武

指令

第三條 逮捕ヲ許サレ時トハ違

警罪及ヒ罰金ノ刑ニ該ル可キ輕

罪ヲ謂フ

宇加島始審裁判所判事外十四年正月九日付
十五年二月六日付

第十二條 刑法中本刑ヲ免シ只監視ノ

第四十三條 數箇ノ裁判

所ノ管轄ナル場合ニ於

テ被告人ヲ逮捕スル

能ハス者クハ法律上逮

捕スルトテ許サレ時ハ

其中ニテ最初豫審又

ハ公判ニ着手シタル裁

判ヲ以テ其管轄ナリト

ス

三、附スル者ハ其管轄ハ本刑ノ種類ニ依リ輕重罪ヲ區別スル儀ト相心得可然哉

指令

第十二條同ノ通

長等輕罪裁判所檢事十五年二月二日
全年四月四日

重罪ノ未遂犯ニテ輕罪ニナルモノハ

矢張重罪裁判所ノ管轄ナリヤ

指令 電信

本月二日 電報同重罪ノ未遂

犯ニテ輕罪ノ刑ニ該ルモノハ重

罪裁判所ノ管轄トス

熊谷始審裁判所檢事十五年二月廿五日
全年二月六日付

重罪ヲ犯シタル者ハ現行非現行

向ハス渾テ豫審判事ニ送致シ

其處分ニ安スヘキ事ハ治罪法

ノ規則ニ瞭然タリト虫モ法律

上一等又ハ二等ヲ減輕スル中ハ

当然輕罪ノ刑ニ處断スヘキ者

アリ假令ハ二十歳未滿ノ者兇

器ヲ携帶シテ人ノ住居ニタル

邸宅ニ入り竊盜ヲ犯シタル者

ノ如シ其本罪ハ重罪ナリト虫

凡刑法第八十一条ニ罪ヲ犯ス時

滿十六歳以上二十歳ニ滿タサ

ル者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ

一等ヲ減ストヤル、依リ二年以上
 五年以下ノ重禁錮ニ處スヘキ
 モノナレハ輕罪裁判所ニ管理
 スルモ敢テ越權ノ處分凡難見
 認想フ、我治罪法草案ニハ
 減輕ニ因リ輕罪ノ刑ニ處スル
 モノト云モ重罪裁判所ニ管
 轄スルノ正條アリト云モ今日
 頒行ノ治罪法中其正條無之
 以上本案ノ如キモノニテ現行
 犯ノ罪証明確ナル者ハ豫審
 ヲ要セス直ニ輕罪裁判所ハ
 公訴ニ可然ト解散仕候ヘトモ

為念一應相伺候

指令

同ノ趣法律上ノ減輕ニ依リ輕罪ノ
 刑ニ該ルハキ者ト云モ元重罪ナ
 ル時ハ其裁判管轄ニ重罪裁判
 所ニ屬スヘキ者トス但特別ノ減
 輕ニ因リ輕罪ノ刑ニ該ルハキ者
 ハ此限ニ非ラス

宇和島始審裁判所判事外明治三十四年五月九日
三十五年三月廿日
 刑十二條刑法中本刑ヲ免ニ只監
 視ノニ附スル者ハ其管轄ハ
 本刑ノ種類ニ依リ輕重罪ヲ區
 別スル義ト相心得可然哉

指令

第十二条 同 通

三重縣

十五年一月二十四日
十五年二月六日

軍人軍属ニシテ普通刑法ノ重
罪輕罪トシテ違警罪トシテ並犯シタ
ル者アル時ハ直ニ逮捕シテ法
衙ニ附スヘキ節ニ可有之処軍
人軍属ノ算ニ違警罪ヲ犯シ
タル者アリテ司法警察官若リ
ハ巡查之ヲ認知スル時ハ止リ其
犯罪發覺ノ地ニ於テ其所属官
職姓名ヲ向テ放還シ警察署
ニ告発シ警察署ハ其告発ニ

付ノ調音ヲ作り及ヒ違警罪何
条ノ刑ニ當ルノ意見書ヲ附シ
從セテ軍衙ニ報告スヘキ義ト
心得可然哉

指令

同ノ趣軍人軍属ニシテ普通刑法
ノ重罪輕罪ヲ犯シ又ハ重罪ト
違警罪トシテ犯シタルハ軍衙
ニ於テ處分スヘキト云モ違警言
罪トシテ犯シタルハ府縣
警察署又ハ分署ニ於テ處分スル
義ト心得ヘシ
但東京府下ハ憲兵所又ハ分屯

所ニ於テ処分スルニ我ト心得ヘシ

新瀉裁判所新谷田支廳諒検事 西曆九月七日
訓 十五年四月廿日

第五條 治罪法第四十三條ニ數箇ノ裁判所
ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スル
能ハサルハ最初豫審公判ニ着手シタル裁
判所ヲ以テ管轄ト定ムルハ旨記載有之夫得
共右ノ例ヘハ甲地ニ於テ犯罪有之既ニ豫審ニ
着手中逃走シタル犯人乙地ニ在テ又同等ノ
罪ヲ犯シ逮捕ヲ受タル場合ノ如キハ必ラス
シモ最初甲地ニ於テ既ニ豫審ニ着手シタル
ルヲ以テ其犯人ハ甲地ニ護送スヘキ哉ト相
心得可也哉

内訓

第五條 乙地ヲ以テ管轄トス

理由 甲地ニ於テ罪ヲ犯シ豫審中乙地ニ
逃走シテ又同種ノ罪ヲ犯シ逮捕セリ以
場合ニ於テハ甲地ノ裁判所ハ最初豫審
ニ着手シタルヲ以テ第四十三條ニ從ヒ管
轄ト定ムヘキカ如シ然レハ該條ニ固ト
被告人ヲ逮捕スルニ能ハサル場合ニ付
キ判定シタル者ニシテ其一旦逮捕ニ就
クニ及シテハ之ヲ適用スルヲ得スヤ
四十一條ノ本則ニ從ヒ乙地ヲ以テ其管
轄ナリトス

滋賀縣

十五年一月十八日付
全 年二月十日付

第十一條 數ヶ所ノ輕罪裁判所管轄

地内ニ於テ輕罪ヲ犯シ逃走中國部

村分明ナラサル所ニテ尚ホ重罪ヲ犯

シタルモノヲ右犯罪地ニアラサル裁判

所ノ管轄内ニ於テ逮捕シラルルハ何

レノ裁判所ヲ以テ其管轄トスル哉

指令

第十一條 逮捕シラルル地ノ重罪裁判

所ヲ管轄トス

第十二條 甲地輕罪裁判所管轄内ニ

於テ甲正犯乙丙從犯ニテ輕罪ヲ犯シ

乙地輕罪裁判所管轄内ニテ乙正犯

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ

管轄スル裁判所ヲ以テ

其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ

屬スル正犯數名アル時

ハ其中ニテ最初豫審

又ハ公判ニ着手シタル

裁判所ヲ以テ其管轄

ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍

裁判所ノ管轄ニ付キ法

律ニ於テ特ニ定メタル

場合ハ本条ノ例ニテラス

同 法 省

丙後犯ニテ輕罪ヲ犯シ尚又丙地輕罪裁判所管内ニテ丙正犯甲乙後犯ニテ輕罪ヲ犯ス者アリ右ノ内甲丙ヲ丙地裁判所管内ニテ逮捕シ乙ヲ甲地裁判所ニテ逮捕シテハ何レノ裁判所ヲ以テ其管轄トスル乎

指令

第十二條 治罪法第四十四條第二項ニ依リ甲地乙地ノ中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ管轄ナリトス

第十三條 府縣限り定ムル違警罪ニシテ甲縣乙縣ト同一ノ刑名マリ而シテ甲

縣ニ於テハ其科料一月以上一月九十五錢以下乙縣ニ於テハ五錢以上五拾錢以下トマル其一面ノ罪ヲ甲乙兩縣下ニ連続シ犯シ来ル者ヲ乙縣下ニテ巡査之ヲ見認リ其地警察署ハ告発シタル其ハ其告発ヲ受ケタル警察署ニ於テハ甲乙兩縣中何レノ違警罪ニ依リ處分スヘキ哉

指令

第十三條 甲縣ニ於テハ甲縣ニ於テ處分シ乙縣ニ於テハ乙縣ニ於テ處分シ各自ニ科スル儀ト心得ヘシ

滋賀縣

十五年一月十二日付
十五年三月十六日付

第二條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁
 新所ヲ以テ其管轄ナリトスルハ
 方四十四條ニ明文アリ然レ正
 犯軍人ニシテ從犯常人ナルハ
 從犯タル常人ハ通常裁判所
 ニ於テ処分スヘキモノ如シ然レ
 正犯タル軍人モ通常裁判所
 ニ於テ係セテ処分スヘキヤ又ハ常
 人軍人共犯ニ係ルハ正犯從犯
 ノ別ナリ各別ニ処分スヘキヤ如何
 但軍人軍屬ニシテ軍律ヲ以
 テ処分スヘキ罪ト常律ヲ以
 テ処分スヘキ罪ト係テスル

如キハ何レノ所轄ト為スヤ如何

指令

第二條 軍民共犯ニ係ル時ハ軍人
 軍屬ハ軍衙ニ於テ処分シ常人
 ハ司法衙門ニ於テ処分スル者ト
 ス

理由治罪法第四十四條末項

並ニ本省本年丁卯二号達

主意ニ因リ

山形始審裁判所檢事

十五年三月請訓
全十五年四月十日

第四條 重罪犯ニ附帶スル輕死

犯アリ例ハ強盜ニ連及スル贓物

ニ及スル罪ノ類豫審終結ノ後

係テ重罪裁判所ニ移スルハ周
 廷迄空シリ教旬拘留ニ却テ
 刑期ヨリ其日教長キヲ加フルモ
 ノヤシトセス之レ等ノ類ハ各別ニ
 其管轄裁判所ニ付スルリ得可
 キモノニ可有之哉
 又ハ同一ノ場所ニ於テ同時ニ兩人
 期セズニテ殴打ノ罪ヲ犯シ一人
 ハ創傷ヲ為サシソス一人ハ篤疾
 ニ致シソリ之レ等ノ類ハ無論
 各別ニ其管轄裁判所ニ移ス可
 キモノニ可有之哉

内訓

第四條同時ニ同一ノ裁判所ニ於テ
 裁判スルル要セザル事件ハ各別ニ
 其管轄裁判所ニ起訴スルリ得
 得ハシ

姫路始審裁判所判事十五年三月廿台請訓
全四年四月十日内訓

明治十四年太政官令四十六号ヲ以テ

前署犯罪ノ地分明ナル被告人トシテ

七管轄裁判所ヨリ囑托アリシル

時ハ逮捕ノ地ノ裁判所之リ官

轄スルキ旨御布告有之右管

轄囑託ノ義ハ豫審判事ヨリ

豫審判事ハ為ス可キ場合無之

ハ論ヲ俟ス必竟犯罪地ノ裁判

所ノ檢察官ヨリ逮捕地ノ裁判
所ノ檢察官ヘ囑託アリタル時
ノ事ト思考江候得共該布告
單ニ載列所ト有之ヨリ聊カ疑
義ヲ生シ候向此段為念御御
内訓候也

内訓

別紙請訓ノ趣檢察官ニ限ラス
豫審判事ヨリ豫審判事ニ囑
託スル一アル義ト心得可シ

宮城上等裁判所檢事 十四年十月廿九日付
十五年五月九日付

第六條治罪法亦四十四條亦一項
ノ場合若シ正犯從犯アリ輕罪事

件ニ付審向中從犯其正犯ニ干係セ
ザル重罪察覺シタル時ハ正犯ト從
犯トヲ分別シ各其管轄ニ屬ス
可オ哉

指令

第六條 先リ正犯ト共ニ豫審
為ニ終結ト上更ニ其重罪ノ豫審
ニ為シ一ノ重キ裁判所ニ於テ裁
判ス但正犯ノ公判ハ遲延スル
及ハス

宮城上等裁判所檢事 十四年十月廿九日付
十五年五月九日付

第六條治罪法亦四十四條亦一項ノ場
合

新瀉裁判所新築田文廳詰検事 十四年九月七日請訓
十五年四月廿日内訓

第六條 同第四十四條末項ニ於テ高等法院

及シ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ

定メタ者ハ以限ニアラスト有之ヲ処若シ軍人

正犯ニシテ常人後犯トナリ常事犯ヲ行ヒ又

常人正犯ニシ軍人後犯トナリ常事犯ヲ行ヒ

タル場合ニ於テハ正犯ヲ管轄スル裁判所一々

管轄スルノ変例トシ軍人ニ軍衛ニ送付シ常

人ニ常事裁判所之ヲ処断スル義ト心得可

然哉

右ハ左ノ通

内訓

第六條 本年当省下第二号ノ達ノ通ニ得

可シ

宮城上等裁判所檢事 十四年十月廿九日付
十五年五月九日付

第六條 治罪法第四十四條第一項ノ場合ニ若

シ正犯後犯アリ輕罪事件ニ付審問中

後犯其正犯ニ干渉セサル重罪発覚シタル

ハ正犯ト後犯トヲ分別シ各其管轄ニ属

スヘキ哉

右ハ左ノ通

指令

第六條 先ツ正犯ト共ニ豫審ヲナシ終結

ノ上更ニ其重罪ノ豫審ヲナシ一ノ重キ

裁判所ニ於テ裁判ス但正犯ノ公判ヲ違

延スルニ及ハス

○ 処断ヲ経レハ素ヨリ我日本ニ於テ処	其管轄ナリトス其住所
断スルニ及ハサルカ如キト云凡若	分明ナラサルハ其裁判
ニ彼ノ国ニテ処断ヲ経スニテ帰	管轄ヲ定ムルノ訴ヲカス
國ニ又ハ治外法権ノ約アル國ニ	可シ
テ罪ヲ犯シ帰國シタルモノモ罰	
セザルニ於テハ外交上大ニ不都合	
ヲ醸成スルノミナラス殊ニ兇惡	
者ヲ我國ニ養成スルノ弊ヲ生	
スルノ恐レアルヲ以テ都テ外國	
ニ於テ犯シタル罪ハ外國ノ法	
律ニ觸ルト否トヲ分タス又外國	
政府ヨリ告訴告発マルト否ト	
ヲ問ハズ犯罪ノ憑証アルハ	

我日本ノ法律ニ依リ処断スヘキノ
 意ニテ草案中ニ明記シタルケ条
 ハ都テ削除モタルモノトス因テ
 本案ノ通

宮城上等裁判所檢事 十四年十月廿九日附
十五年五月九日附

第七條治罪法亦四十五條外國ニ在テ犯
 シタル罪日本國ノ法律ニ依リ処断ス
 可キ者トハ刑法草案四條ニ掲載シ
 タル重罪或ハ輕罪事件ニシテ内國
 ニ於テモ猶ホ危懼ヲ致シ擾乱ヲ未
 スノ懼アル者而已之ヲ罰スルノ精
 神ナル乎然ルニ刑法草案亦四條
 亦五ノ兩條ハ審査ノ際削除セラレ

タルニ高ホ本条ヲ存置セラルル所以
モノハ外国ニ在テ犯シタル罪日本
ノ法律ニ照シテ重罪輕罪ト為ル可
キ事件ナル時ハ草案亦四条ニ定
ムル如キ區別ニ拘ハラス總テ之ヲ
罰ス可キノ精神ナリヤ

指念

亦七条 其罪ヲ區別セス一体ニ本
條ニ依リ処分ス可キ者トス

滋賀縣警部

十四年二月廿一日 實向
全 年三月六日 回答

治罪法第四十六條ニ高船内ノ犯罪ニ

付テノ管轄及訴訟ノ手續ハ別ニ法律

ヲ以テ之ヲ定ムトアレバ本縣下湖水中

ヲ往復スル汽船ノ如キハ其犯罪ノ何

所ニアリシヲ向ハス船中犯罪アリシ

ヨリ直チニ着港セシ地ヲ管スル裁判

所ヲ管轄トナシ尋常ノ手續ニ後ヒ

處分ヲ為シ可然哉

田 答

湖水中ト雖モ高船内ノ犯罪ニ係リハ

高船内犯罪ニ付テノ管轄及ヒ其訴

訟手續ニ後

第四十六條 高船内ノ犯

罪ニ付テノ管轄及ヒ訴

訟手續ハ別ニ法律ヲ以

テ之ヲ定ム

熊谷始審裁判所長判事十四年十二月七日電信

軍人常ノ罪ヲ犯スニヨリ檢事ヨリ其

処分ヲ求メタリ右ハ公訴ノ外ナル

ヲ以テ當廳ニテ処分スヘキモノニ

アラスト信ス如何

指令

軍人常事犯ノ場合ニ係ル処分方

同ノ件ハ本年一月丁卯二号當省

達ニ依ルヘシ

宇和島始審裁判所判事十四年十二月五日仰

亦三条治罪法分四十六條ニ商船

内ノ犯罪ニ付テハ管轄及ヒ訴訟手

続ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムト有

之前條々ノ法律未ク頒布不相
成新法實施ノ余日モ無之如何
相心得可然哉

指令

亦三条十四年分六十五号布告

ノ通

松山始審裁判所判事

十四年十二月廿二日請訓
十五年一月廿三日内訓

第三條 治罪法第二百三十六條ニテ故

障ノ判決ナシトシテ裁判官ハ同法第四百

七條ノ例ニ照シ其公判ニ干預スルヲ

得サル義ニ有之候哉果シテ然レハ若

シ判事寡敷ニシテ其廳中他ニ其公判

スヘキ判事無之ハ檢事ヨリ管轄定メ

ノ訴ヲナスヘキ義ニ有之候哉

内訓

第三條 判事之レナキハ分五十七條ニ

依リ判事補其職務ヲ行フ

第四條 同法第二百一十一條ニテ被告人

ヲ逮捕スルノ不能巡查ヨリ已ニ全状返

第四百七條豫審ヲ為シタ

ル裁判官ハ其公判ニ干

預スヘカラス前ニ豫審

又ハ公判ヲ為シタル裁判

官ハ哀訴及ヒ闕席裁判

ニ對スル故障ヲ除クノ外

其上訴ノ裁判ニ干預ス

可カラス以規則ニ背キタ

ルハ其言渡ノ效ナカル

可シ

付以後其事件ノ終結ナシタル場合ニ於テ若シ被告人自ガラ出廷シテ故障ヲナスコト勾留ヲ受コトヲ求ムルコトハ其終結ノ言渡未ヲ確定セサル以前ナルヲ以テ仍ホ前掛リノ判事ニ於テ之レニ對シ勾留状ヲ發シ得ヘキ義ニ有之候哉

内訓

第四條 意見ノ通

宇和島始審裁判所判事十一年四月三日付
全一第百八十八号付ノ二條 治罪法ノ四十七條ニ豫審ヲ為シタル裁判官ハ公判ニ干預ス可カラストアリ此ニ豫審終結

ノ言渡ニ對シ檢事又ハ被告人ヨリ故障ノ申立ヲナシタリ因テ同法ノ二百三十六條ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ判決ヲナシ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲナシタル後右判決ヲナシタル判事ハ其事件公判ニ於テ預テラサル義ニ候哉

指令

第二條 會議局於テ判決リ為シタル裁判官ハ治罪法ノ二百五十五條ノ場合ニ於テ豫審ヲ

為シタル者ヲ除ク、外其事件ノ
公判ニ干預スルコトヲ得

〔理由治罪法第四十七條、公判
ヲ為シタル裁判官ハ其上訴
ノ裁判ニ干預ス可カラサル
旨ヲ明記スルモ上訴ニ非レ
モテ公判ヲ為スハ該條ニ関
係アラサルナリ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ
受ケタル事件ニ付キ自ら
其管轄ナリヤ否ヲ判決
スルノ權アリ其判決ニ付
テハ本案ノ事件終審
ナル可キ場合ト雖モ通
常ノ規則ニ從ヒ檢察官
其他訴訟關係人ヨリ上
訴スルコトヲ得

